

『湯けむりの向こうに』 山口県立山口高等学校演劇部 2020 年度上演作品

作者 浅川美代子

上演 山口県高等学校演劇大会 優秀賞

作品紹介 夏のある日、東京からやってきたライターのおケミズはローカル線の小さな無人駅に降り立った。そこに現れた温泉守の老人モリノは、おケミズにある不条理な要求を突きつける。消えゆく故郷を思う人々とのひとときのふれあいを通じて、二人の頑なな心に何かが生まれる。山間の町「ゆのまち」の物語。

登場人物 7人(男3、女4)+声1 ※性別の変更が可能です。

上演許可を得るための連絡先 asakawa.miyoko.tg@m.ysn21.jp

第39回山口県高等学校演劇大会

上演5 (山防) 山口高等学校

謝けむりの向しん

山口高校演劇部 作

登場人物

オケミズ

(温泉ライター)

カガミ

(町役場の観光課職員)

モリノ

(温泉守の老人)

キヨノ

(ゆのかわ鉄道職員)

トダ

(観光課課長)

イズミ

(モリノの孫)

タナカ

(デイケアセンター職員)

車掌(声)

「湯けむりの向こうに」

M 「いい湯だな」 C・I・

M ややダウン、音の割れた車内アナウンス。幕が上がる。ダークオープン。

車掌（声） 次の停車駅は、ユノマチ。まもなく、ユノマチに停車いたします。まもなくユノマチ・・・

M アップのち F・O・、同時に列車が止まる音。同時に照明 C・I・ 暑い夏の昼間。

ローカル線の小さな駅。無人駅である。フェンスの向こうはホームと線路、改札らしきフェンスの切れ目の前に階段。そこを降りるとすぐに道路端。それほどまでに小さな、駅とも呼べないような駅。列車（音）はホームを出てやがて去る。

列車を降りた男（オケミズ）がフェンス越しに現れる。手には立派なカメラ。走り去る列車にカメラを向けてシャッターを切る。いい空気を味わい、美しい景色を写真に収める。そのまま景色を眺めながら改札と言うにはあまりにお粗末な改札を通ろうとする。切符を切符入れに入れる。が、行く手を阻まれる。

オケミズ は。どうということ。

見ると、改札にチェーンが掛けられている。しかも、錠がいくつも。オケミズ、どうしたものか、しばし思案。

役場のカガミ、息を切らせて現れる。

カガミ すみませーん。遅れちゃいまして。

オケミズ え。

カガミ 観光課のカガミです。

オケミズ ああ、

カガミ よろしくお願ひします。

オケミズ どうも。

チェーン越しに名刺渡す。思わず受け取るオケミズ。

カガミ オケミズさん、ですよね。

オケミズ はい。

カガミ ようこそ、ユノマチへ。

オケミズ どうも。

カガミ お待ちしていましたよ。

オケミズ あの、ここが、

カガミ はい。今、開けますんで。

カガミ、鞆を開け、じゃらりとたくさんの鍵を取り出す。錠を開け始める。

オケミズ いつもこうなんですか。

カガミ いえ、今日が初めてです。この春、観光課に配属されたばかりで。

オケミズ じゃなくて

カガミ え？

オケミズ この駅、いつもこうなんですか。

カガミ 無人駅、初めてですか。

オケミズ いいえ。

カガミ そうですかー。

オケミズ でも、ここ（改札）が通れないのは初めてです。

カガミ ああ。

オケミズ いや、納得されても。

カガミ すぐ開きますんで。

オケミズ もうかなりかかってますけど。

カガミ、次々とカギを出しては錠を外し続ける。

外しても外してもまだまだ沢山錠が係っていて、チェーンはなかなか外れない。

カガミ あれ、おかしいな、ええと。こつちかな、え？・・・あれ。

どうやら合うカギが見つからないらしい。

モリノ そうそうたやすく外れてたまるかい。

老人がカガミの後ろに仁王立ちしている。

カガミ モリノさん。ちようどよかった。手伝ってください。ここがどうしても開かないんですよ。

モリノ 錠ならここにあるわ。

カガミ 助かりました。

と、手を出すのが、モリノ、鍵をひよいと持ち上げてカガミには渡さない。

モリノ (オケミズに) あんた、どっから来た。

オケミズ 東京です。

モリノ はー。

オケミズ (むっとして) なんすか。

モリノ で、何の用事か。

オケミズ 取材ですよ。

モリノ 取材。

オケミズ 取材です。

モリノ 何の。

オケミズ ここに温泉以外何があるっていうんですか。

カガミ 役場にもご連絡いただきましてね、これからご案内するところなんですよ。

モリノ ほお。

カガミ ということでモリノさん、そのカギを、

モリノ 断る。

カガミ えー？

オケミズ はあ？

モリノ お前のようなやつに入らせる湯はねえ、とつとと帰れ。

オケミズ お前のようなやつ。

モリノ ワシは帰る。

モリノ、踵を返し立ち去ろうとする。

カガミ 待ってください、モリノさん。

モリノ 何じゃ。

カガミ オケミズさんは、今一番の売れっ子温泉ライターなんですよ。

モリノ 火い付けようってのか。

カガミ ライター違いです。

モリノ けしからん、帰れ。

オケミズ なんなんですか、さつきから。

モリノ うん？

オケミズ お前のようなやつって、なんですか、それ。オレの何がいけないってんですか。

モリノ それそれ、それじゃ。そういう無礼なもの言い方するやつにロクなのはおらん。

オケミズ どっちが無礼だよ。

モリノ どうせ、またワシらの大事な湯を土足で踏みにじる気じゃ。早う帰れ。

カガミ モリノさくん、町のことも考えてくださいよ。

モリノ ふん。

カガミ この町が生き残るには、あの温泉しかないんですよ。

モリノ 生き残るじゃと。

カガミ はい。温泉で町おこし、これですよ。

モリノ 町おこしか。

カガミ はい。

モリノ ふん、バカのひとつ覚えみたいに、町おこし。

カガミ バカじゃありませんー。

モリノ バカたれ。税金で給料もろうとるんじやろ。それなりに頭を使わんかい。

カガミ 頭ですか。(ここで頭の使い方を探るおばかさんである。)

モリノ お前ら役場がそうじゃから、よそのモンになめられるんじゃ。しっかりせんかい。
カガミ はい。

オケミズ なめてないっすよ。

モリノ ああ？

オケミズ オレは純粹に、隠れた名湯を発見して、世の中に広めたいんですよ。心から温泉を愛してますから。

カガミ さすが、オケミズさん。（パチパチパチ・・・）

モリノ 発見！（カガミの拍手ぴたりと止む）

オケミズ いけませんか。

モリノ わしらのご先祖が見つけた湯を、発見！ はっ、ずうずうしい。

カガミ まあまあ、モリノさん。そこは言葉のアヤつてやつで。

モリノ ええかげんなことを言うな、役場が。

カガミ すみません。

モリノ すぐに謝るな。

カガミ すみません。

モリノ 謝るなと言うたろうが。

カガミ すみま・・・

ギロリとモリノに睨まれ寸止め。ごっくん。一大決心でもう一度口を開く。

カガミ モリノさん。これはユノマチの存続をかけた勝負なんです。

モリノ 勝負とな。

カガミ はい。町の存続をかけた大一番です。

モリノ、身じろぎもせず。何か考えているのか。

カガミ モリノさん？

モリノ わかった。

カガミ ありがとうございますま・・

モリノ じゃあ、誠意を見せろ。

オケミズ 誠意。

カガミ 誠意。

モリノ 誠意じゃ。

カガミ とは。

モリノ 言葉どおりの意味じゃ。

オケミズ どういうことですか。

モリノ これまでの悪事の数々を、全部謝ってもらおうじゃあないか。

カガミ あの、私がどんな悪事を。

モリノ お前じゃあない。そいつじゃ。

カガミ 悪事の・・(と、オケミズに対して犯人でも見るかのような視線を送る)

オケミズ 数々って、今日初めてここに来たのに、何をしたって言うんですか。

カガミ (我に返り) そうですよ。オケミズさんは悪くありません。

モリノ いいや、お前はお前の仲間を代表して、わしらに謝罪するんじゃ。

オケミズ 仲間ってなんですか。

カガミ モリノさん、オケミズさんは、フリーのライターなんですよ。今日もこうやって一人で。

モリノ これまでもお前みたいなのが、何人も来たんじゃ。

カガミ え。(再びオケミズに怪訝そうな顔をむける)

オケミズ オレの知り合いには、ここ、知ってるやつはいませんよ。

カガミ　ですよね。

オケミズ　でなきや、オレが見つけたことにならないじゃないですか。

モリノ　お前みたいなのが、と言うたじやろうが。

カガミ　前にも取材されたことがある、つてことですか。

モリノ　忘れません。わしの足腰がまだ達者じやったころじや。

カガミ　はあ、それは相当昔ですねえ。

モリノ　こら、役場。

カガミ　私のことでしょうか。

モリノ　ほかに誰がおるんか。

カガミ　そうですね。

モリノ　お前も知らんのか。

カガミ　と申しますと。

モリノ　ふん。もう何年も昔じや。

モリノ、ベンチに腰を下ろして

モリノ　お前みたいなカメラを提げたモンが、わしらの湯にやってきて、写真を撮っていきよった。湯には入りもせずに、写真だけじや。ふざけおつて。

オケミズ　いいじゃないっすか。大事な湯に、誰も入らせたくないんでしょ。

モリノ　湯なんかなんもわからんくせに。おかしげな雑誌に載ったとかで、きやーきやーきやーきやーうるさいねえちゃんらが、毎週毎週押し寄せるようになったんじや。

カガミ　ええ、そんなに。

モリノ　週末の度にわんさかじや。

カガミ　ああ、女性誌かあ。いいですねえ。やっぱり旅行誌よりPR力ありますねえ。

モリノ おかげでわたらの湯治場は台無しじゃ。

カガミ 台無しじゃないですよ。

モリノ はあ？

カガミ 宣伝がうまくいって、観光客がどっと。これが町おこしですよ。そうか、前にも成功してるんですね。うん、間違いない。

モリノ 町のモンが湯を使えんようになるのに、何が町おこしか。

オケミズ 温泉しかない町に、お金が入るんですよ。そしたら、もつといいものが手に入りますよ。

カガミ そうです、その土地の財産でお客さんを呼ぶ。町が潤う。これが町おこしです。

モリノ うるさい。

カガミ (しゅん)

モリノ こら、役場。

カガミ 私のことでしょうか。

モリノ お前がこいつを謝らせろ。

カガミ 私がですか。

モリノ そうじゃ。

カガミ えー。

モリノ わしの気が済むようにこいつを謝らせたなら、

カガミ たら(ごくり)

モリノ ここを開けてやろう。

カガミ がんばらせていただきます。

オケミズ なんであんたがそんなに偉そうにするんだよ、じいさん。

モリノ また無礼な物言いが聞こえたのお。

カガミ オケミズさん。モリノさんは、あの秘湯がある山の地主なんですよ。

オケミズ 地主。

カガミ 許していただかないと、湯治場には近づけません。
モリノ いらんこと言うたらんで、早う頭下げさせえ。
カガミ はいっ。

カガミ、いそいそとオケミズに歩み寄り

カガミ オケミズさくん、

オケミズ 嫌です。

カガミ 早。

オケミズ 当然でしょ。

カガミ 一旦、考えましようよ。

オケミズ 嫌ですな。

取り付く島なし。カガミ、仕切り直して

カガミ あー、オケミズさん。ここはひとつ、良い記事を書くためということで、ちよつとだけ謝ってみて

いただけませんか。

オケミズ 嫌だつて言つてるでしょ。

カガミ オケミズさあん。

キヨノ あくあくあくまたこんなことに！

鉄道職員キヨノ上手から登場。チェーンのかかった改札しか目に入っていない様子。

カガミ キヨノさん。

キヨノ また今回はいつも以上にがちがちじゃないですか。あーあーあー。カガミ キヨノさん。

キヨノ 困ったなああのじいちゃん。もうどうしようこれ。

カガミ キヨノさん。

キヨノ ああ、観光課の。

カガミ あのそちらに、

キヨノ ん？（ようやくモリノに気づいて）ああっ！モリノさん？！

モリノ またひとり役立たずが増えたわい。

キヨノ 今日もお元氣そうぞ。

モリノ おお、耳も達者じゃからの、悪口も全部聞こえとるぞ。

キヨノ えー、またまたー。（やばい）

カガミ （オケミズに）こちらユノカワ鉄道のキヨノさんです。

オケミズ どうも。

キヨノ 申し訳ございません、お客様。

モリノ そいつには謝らんでもええ。

キヨノ （モリノは無視して）めったにない外からのお客様なのに、こんな。本当にすみません。

モリノ こんなとは何か。おお？

キヨノ いや、あの、その。

オケミズ やっぱりいつもこうなんですか、この駅。

キヨノ （こっそり）モリノさんがすぐに改札を通れなくしちゃうんですよ。

オケミズ なんですとか。

キヨノ よそから人が来るのをすごく嫌がるんですよ。（内緒話のつもりらしいが声が大きい）

モリノ ないしょ話のつもりか。

キヨノ おっと地獄耳。

オケミズ どうでもいいんで開けてもらえませんか。

キヨノ はい。

モリノ 開けさせんぞ。

キヨノ ええっ

モリノ こいつが謝罪するまでは絶対に通さん。

キヨノ 謝罪？ どういうことですか。

カガミ あのですねー。

モリノ 言わんでええ。 駅は口を出すな、引っ込んで。

キヨノ 駅？ (て、私のことですか、んもー)

オケミズ ？

カガミ (オケミズに) モリノさんは人の名前、絶対に呼ばないんですよ。 私は役場、キヨノさんは鉄道職

員だから駅、ほかにも郵便とか農協とか・

モリノ ほれ、はようせい(と、カガミに)

カガミ はい？

モリノ 謝罪じゃ！

カガミ はい！。

オケミズ しつこいなあ。

キヨノ あの、何をなさったんです？

オケミズ 何もしてません。 言いがかりですよ。 昔の取材がよほど気に入らなかったみたいですね。

キヨノ ああ。 聞いたことがあります。

オケミズ だからって、オレが謝らなきゃいけない立場にありますか。

カガミ オケミズさん。

オケミズ (イラついたため息)

モリノ 役場、初めからやり直せ。

カガミ はい。

キヨノ 何するんです？

カガミ オケミズさん、ここはひとつ、良い記事を書くためとということ、ちよっとだけ謝ってみていただ
けませんか。

オケミズ さっき言いましたよね、それ。

カガミ はい。もう一度初めからやり直してみました。

オケミズ じゃ、オレもそうします。「嫌です。」

カガミ んんんんちよっとでいいんですよ。簡単でしょ。

オケミズ 謝罪にちよっともたくさんもないでしょ。

カガミ 温泉の写真、撮りたいでしょう。

オケミズ 撮りたいですよ。

カガミ だったら、

オケミズ オレは、温泉のすばらしさを全国の、いや世界の人々に伝えたいんです。誇りもって仕事してま
すよ。だから、こんな田舎にだってやってくるんです。

モリノ 田舎が嫌なら来るな。

オケミズ 嫌じゃないって言ってるんでしょーが。いちいちつかかるなあ、このじいさん。

カガミ オケミズさん、落ち着いて。深呼吸しましょう。

オケミズ 落ち着いてますよ。(大興奮)

モリノ 落ち着いとるやつと言いがさがこれじゃ。

オケミズ な！（いらついてつかみかかりたいが改札にはチェーン、そして二人の間にはフェンスなのであ
る）

カガミ モリノさん。

キヨノ これ、私もなんかした方がいいんですかね。

カガミ (オケミズに) 謝りましょう。

オケミズ (ふん！)

カガミ 社会人なら投げ出さず、仕事は最後まで責任もってやり遂げましょう。

オケミズ 別に投げ出してませんよ。人を無責任とか言うのやめてもらえます？

カガミ だったら責任とってくれるんですね？

オケミズ だから、それ、オレの仕事ですか。

カガミ いいですか、謝罪は、社会人の重要なスキルです。

オケミズ はあ？

カガミ ユノマチ観光課、期待の星、私、カガミが教えますから。

オケミズ そんなの、教えられなくてもできます。

カガミ じゃあ、

オケミズ やつてもないことは、謝れませんね。

カガミ オケミズさくん。

オケミズ (無言)

カガミ、次の一手が打てずに困る。

キヨノ あの・・さつきから何やってるんですか。

モリノ ほれ、駅も協力せんか。

キヨノ え？

モリノ こいつが謝ったら、ここを開けてやると言うとするんじや。

キヨノ ああ、そういう。

オケミズ 納得するところじゃないでしょう。

キヨノ 仕方ない、お客さん、ここは一度謝りましょう。

オケミズ 何が仕方ないんですか。それに、なんでそのじいさんでないところを開けられないんですか。あ

なた鉄道の職員でしょ。

キヨノ モリノさんはこの町の法律みたいな方ですから。

オケミズ 法律？

キヨノ いや、歴史かな。

オケミズ 黒歴史ですね。

モリノ どういう意味じゃ。

オケミズ やっぱ耳だけは達者だな。

キヨノ モリノさんは廃止になりそうだったこの路線の存続運動の先頭にたつてくれたんですよ。

オケミズ ゆのかわ鉄道のですか。

カガミ そうです。赤字で路線廃止が決まったのを、断固反対の運動をして、町を巻き込んで第三セクタ
ーの鉄道会社を作ったというわけです。

オケミズ へえ。

カガミ 当時の町長に直接掛け合つて町からの出資の話をつけたって聞きましたよ。

キヨノ モリノさんと元町長はガキ大将と子分の仲間なんですよね。

モリノ 泣き虫のあいつの面倒を見てやりよつたんじゃ。

カガミ モリノさんはこの町の裏町長ってとこですね。

モリノ わしにたてつくやつはここにはおらん。

カガミ 無人のこの駅も何かと面倒見てくれて。

キヨノ ここの掃除とかちよつとした修理とかもずつとしてくださってるんですよ。

モリノ 駅が頼りないからの。

オケミズ で、勝手にこんなことまでしてくれちゃってるってことですね。

モリノ 勝手なものか。わしらの駅じゃ。

キヨノ お客さん、何があつたかわかりませんが、謝ってもらえませんか。

オケミズ あなた、オレが何したと思つてそんなこと言ってるんですか。

キヨノ わかりませんけどモリノさんを怒らせちゃったんでしょ。
オケミズ 何もしてませんよ。

キヨノ でも、とにかくここを開けてもらわないことにはどうにもならないんで、ひとまず謝罪を
オケミズ 筋の通らないことは絶対にしない主義なんで。

キヨノ 困ったなあ。

モリノ こら、駅、まだか。

キヨノ モリノさん、もう勘弁してくれませんか。

モリノ 許すか許さんかは、そいつ次第じゃ。で、どうなんか。

キヨノ ちよつと待ってください。

オケミズ 全然ちよつとじゃすみませんよ。

話は一向にまとまる気配を見せない。膠着状態。キヨノ、カガミを端っこに呼び寄せて、

キヨノ どうします？お客さん相当イラついてますよ。モリノさんも聞かないし。

カガミ よし。こういう時は気持ちをほぐすことからですね。

キヨノ えー、めらめら怒りの炎が燃えてますよ。

カガミ 私も燃えてきました。作戦を変えて、私の軽妙なトークでお二人の怒りを鎮火させて見せましょう。

カガミ、再びオケミズの説得に取り掛かる。

カガミ オケミズさん。

オケミズ 何ですか。（機嫌悪い）

カガミ （ちよつとひるむが気を取り直して）もしかして、素直ににごめんなさいが言えないタイプですか。
オケミズ タイプとかじゃなくて、おかしいでしょう。

カガミ ええ？

キヨノ 火に油を注いでしまった。

オケミズ どこがやったかわからないことでオレが謝罪するとか。

カガミ うーん。

オケミズ じゃあ、カガミさん、例えば、どこのだれだかわからないヤツがあなたを殴るとしますよ。で、

そいつが走って逃げちゃって、そこにたまたま現れた犯人となく顔の似た人が、全くの赤の他人が「申し訳ございません」って謝ったら、あなた、納得するんですか。すつきりするんですか。

カガミ そりやしませんね。

オケミズ でしょ。そういうことを、オレにやれって言うてるんつすよ。

カガミ 極端な例だなあ。

オケミズ おかしいですよ。

カガミ でも、オケミズさんと同業の方のことですし、

オケミズ 関係ないです。

カガミ ここはひとつ、温泉ライター代表、ってことで。

オケミズ しません。

カガミ 日本一の温泉ライターってことで。

オケミズ おだてたつてだめです。

カガミ オケミズささくくさん。

オケミズ それに、そのライターだって、なにか謝らなきゃいけないようなこと、しましたか。この、何も
ない町に、客を呼んだんでしょ。感謝されて当然なのに、逆じゃないですか。日本全国の温泉ライ
ター代表して、感謝状もらいたいくらいですね。

カガミ 感謝状ですか。なるほど。(真剣)

オケミズ 本気にしないでください。いりませんよ。

カガミ じゃあ、どうでしょう。オケミズさんは「ごめんなさい」、モリノさんは「ありがとう」で、お互

いチャラっていうのは。

モリノ わしはありがたいなんてひとつも思ったらん。

オケミズ 絶対にしません。

モリノ 誰がこんな小僧に。

オケミズ 誰がこんなくそじじいに。

キヨノ お二人とも落ち着いて。

カガミ そうですよ。

モリノ 落ち着けじゃと。(ぶちん!) 誰のせいになつとると思つとるんか、この役立たずが。

オケミズ そうですよ。カガミさん、だいたい、あなたがちゃんとここを開けといてくれないからこんなことになつていゝんですよ。ちゃんと話つけてといてくださいよ。

カガミ ええ?私?

モリノ そうじゃ、役場がしつかりしとらんからじゃ

カガミ え

オケミズ 頼みますよ。(対カガミで初めて二人が意見の一致をみる。)

カガミ ええっ

モリノ まったくじゃ。

オケミズ ほんとに。

カガミ 意地悪はやめてください。

モリノ 誰が意地悪じゃ、この役立たず。

カガミ モリノさん(泣)。

モリノ ふん。

カガミ(助けを求めて) オケミズさん(泣)。

オケミズ 知りません。

カガミ、キヨノに助けを求める視線を送るもスルーされる。
カガミ、困り果てる。

カガミ ちよっと役場に戻って相談してきます。

こそこそと立ち去る。

キヨノ あ、カガミさん！

モリノ 逃げよったわ。

オケミズ 逃げましたね。

二人、一瞬心がつながったような錯覚で目が合うがすぐにそらす。

二人 ふん。

沈黙。

キヨノ えーと、モリノさん、そろそろ私も、ほかのところを回るんで行きますけど、これ、外してもらえませんかねえ。

モリノ ダメじゃ。今まで何を聞いておったんか。

キヨノ 困りますよ、駅はみんなのものですから。

モリノ 使うモンもそんなにおらんじやろう。町のモンの行き帰りには使えるようにしてやっどる。

キヨノ いつでも誰でも使えるのが駅ですよ。

モリノ わしがおらんかったら駅はなかったんじや。

キヨノ そうですけど。

モリノ こいつらがわしらにしたことを謝罪するまでは絶対にダメじゃ。

キヨノ 昔のことなんでしょ。

モリノ 時間がたてばなかったことになるんか。

キヨノ そりゃ、なりませんよ。

モリノ そうじゃろう。

キヨノ でも、謝っても、なかったことにはならないですよ。

モリノ わしはこのまま死ぬまで腹を立てておらんといけんのか。

キヨノ まだまだモリノさんは死にませんよ。

モリノ うん？

キヨノ 怒ってるときのモリノさんはすごくお元気そうですから

モリノ じゃあ長生きのために、腹を立てておくことにするわ。

キヨノ あ、いや、

モリノ この通りぴんぴんしとるから、早う行け。

キヨノ すみません。もうちよつとだけ、モリノさんの昔話につきあってあげてください。

オケミズ え。

モリノ わしは昔話なんかせんぞ。(と元気)

キヨノ ね、まあ、これが元気の素みたいなモンですよ。

オケミズ あの、

キヨノ そのうち気が済むかもしれないし。

オケミズ ちよつと、ここ、

キヨノ よろしくお願いします。

キヨノ、そそくさと去る。

モリノ おまえに話しなぞせんわい。
オケミズ オレもじいさんの昔話なんか聞きに来たんじゃありません。

沈黙。

と、そこへ上司に引つ張られ、説教されながらカガミが戻ってくる。

トダ なに考えてるの、お客さんを駅に一人で置き去りとか。責任もって最後までちゃんと仕事しなさい。
カガミ 一人じゃないです。モリノさんもいます。ゆのかわ鉄道のキヨノさんも。
トダ へりくつ言っていないの。

モリノ 駅はもう帰ったぞ。

カガミ キヨノさん。

トダ ほら、ユノマチ観光課の星になるんでしょ。

カガミ 僕もがんばってはいるんです。

トダ がんばってさえいればいいってことじゃないの、結果。仕事は結果よ。

カガミ トダさくん(泣)。

トダ 泣くな！

トダ、きりりとモリノに挨拶。

トダ モリノさん、ご無沙汰してます。

モリノ ふん。あんたか。

トダ カガミがお世話になります。

モリノ 世話はしとらん。

カガミ いじめられてます。

モリノ なんじやと。

トダ カガミが何か失礼を。

モリノ 失礼しないわ。

トダ この春からうちの課で預かってまして。

モリノ ぴしゃつと躰けんかい。

トダ 申し訳ありません。オケミズさんですね。

オケミズ はい。

トダ ユノマチ観光課課長のトダです。

オケミズ どうも。

モリノ この通り、挨拶もろくにできん無礼者じや。

オケミズ ろくに挨拶もさせてくれないじやないですか。

モリノ するなとはいうとらんど。ほれ、してみい。

オケミズ 今更（したくもありません。ぐぬぬぬ）。

カガミ というわけです。

トダ 何が「というわけ」なの！

カガミ んくくく。

トダ、カガミを隅っこに連れていき

トダ あのね、カガミ君、正念場なのよ、ここが、ユノマチの。

カガミ はい。わかってます。

トダ じゃ、復習。町が経済的に自立できないとどうなるの。

カガミ やよ市と合併です。

トダ そう。で、どうなるの。

カガミ ユノマチは実体がなくなって、いずれ消えていく。

トダ はい、よくできました。

カガミ でも、悪い方にばっか考えすぎじゃないですかね。

トダ 町がなくなってもいいの。

カガミ 名前が変わるだけじゃないですか。

トダ やよ市の属国になるのよ！

カガミ 属国って。

トダ みたいなもんよ。

カガミ この際思い切って合併したら、今回の観光キャンペーンだってもっとお金掛けてぱーっとできるかもしれないじゃないですか。

オケミズ ちよつと、ユノマチが合併って、そうなんですか。

トダ オケミズさん、その辺も含めて取材をお願いしたいんですよ。

オケミズ いや、ちよつと待ってください。オレは温泉のすばらしさを世界に

トダ そのすばらしい温泉のある山間の小さな町が今消えようとしている、ということも一緒に

カガミ 実際に消えるわけじゃないですよね。

トダ 消えるも同然よ。

オケミズ オレ、そういう政治的なことはちよつと。

モリノ 何をごちゃごちゃぬかしとるか。

カガミ モリノさんはどう思われますか。

モリノ わしには難しいことはようわからん。

オケミズ でしょうね。

モリノ なんか言うたか。

オケミズ 恐ろしいほど耳だけはいいな、ホント。

イズミが走ってやってくる。

イズミ おじいちゃん！

モリノ おお、（でれでれ）イズミちゃんかあ。

イズミ もう、探したよ。お昼も食べないでいなくなるから。どこかで倒れてるんじゃないかと思った。
オケミズ 倒れてくれたらよかったのに。

モリノ ただの散歩じゃ。

イズミ 今日デイサービスの日でしょ。

モリノ （ぶん）わしはあんなもんにゃあ行かん。

イズミ 行こうよ。

モリノ 嫌じゃ。

イズミ また腰が痛くて歩けなくなるよ。

モリノ あの湯に入りやあ大丈夫じゃ。

イズミ 自分で歩いて湯治場まで行けなかったら、お湯には入れないよ。

モリノ 歩けるわい。

イズミ うそ。痛いんですよ。

モリノ 痛うない（むむむ）。

イズミ ほんとに？

モリノ 嘘は言わん。

イズミ じゃあ、立ってみて。

モリノ おお、なんぼでも。

モリノ、立ち上がるうとすることができない。

イズミ ほら、無理するからよ。ね、いこう。

モリノ 無理なんかしとらん。

イズミ タナカさんも迎えに来てくれるよ。

デイケアセンターのタナカ、息を切らせて現れ

タナカ モリノさん、心配しましたよ。よかったご無事で。

イズミ 心配してあちこち探してくれてたんだから。

モリノ ふん。

タナカ さあ、行きましょう。

モリノ いかん。

タナカ 今日は体操の先生もいらしてますよ。

イズミ おじいちゃん。

モリノ ああ、わかったわかった。

タナカ よかった。向こうに迎えの車、待たせてますから。立てますか。

モリノ、タナカに助けられてよっころしよと立ち上がりながら

モリノ 役場。

カガミ はい。

モリノ 後を頼んだぞ。

カガミ え。

モリノ 絶対に追い返すんじや。

カガミ ええっ

モリノ 絶対じゃ。わしが戻るまで、ここで番をせい。

カガミ 私がですかあ。

オケミズ 戻ってくる気かよ。

モリノ イズミちゃん。

イズミ なあに？

モリノ、小銭を取り出しイズミの手に握らせる。

モリノ じいちゃんの迎えありがとうなあ。ジュースでも買うがええ。

イズミ ありがとう。

タナカ モリノさん、体操の先生、帰っちゃいますよ。

モリノ、タナカが手を貸そうとするが払いのけて

モリノ 一人で歩けるわ。

タナカ はい。じゃあ、後ろにいますからね。ゆっくりでいいですよー。

モリノ 大丈夫じゃと言うところが。

タナカ はいはい。

モリノ わしは戻ってくるからの。

モリノ、無理してせかせか歩こうとするが、牛の歩みである。

タナカに付き添われて去る。見送る一同。

イズミ すみません。おじいちゃんがまた？

カガミ そうなんですよ、またここにチェーン掛けちゃったんですよ。

イズミ すみません。

カガミ いや、イズミさんに謝ってもらわなくても。

イズミ おじいちゃん、鉄道が嫌いだから。

オケミズ え？存続運動の中心だったって聞きましたけど。

イズミ 鉄道を残したこと、後悔してるみたいです。

カガミ なんですか。

イズミ 結局、町のためにならなかったって、このごろよく言ってます。

オケミズ でも、町の住民の大事な足、じゃないんですか。

イズミ、ところであなた誰ですか、という視線をオケミズに投げる。

カガミ あ、こちら、温泉ライターのオケミズさんです。

オケミズ どうも。

イズミ、会釈。

イズミ オケミズさん、今日、ここに来るまで列車に何人乗ってましたか。

オケミズ えっと・・・。

オケミズ、指折り数えるが二、三人で手は止まる。

トダ ほとんど空の車両でしょ。ユノマチは県で一番の過疎の町ですからね。

カガミ 本数少ないし、不便だから誰も乗らないですよ。車があるし。

オケミズ 結局、赤字路線のまま、てことですか。

トダ ここにチェーン掛けちゃったらますます利用客減ってしまうのに、わかってるんですかね、モリノさん。

カガミ よそ者を入れないためっておっしゃってましたよ。

オケミズ よそ者ですみませんね。

カガミ いや、あの、

イズミ 私を出したくないんだと思います。ここから。

オケミズ え。

トダ まあ、モリノさんが鉄道を恨みに思う気持ちもわかりますよ。とうとう高校もなくなりましたからね。

オケミズ 鉄道とは関係ないでしょ、それ。

トダ ありますよ。

カガミ あるんです。

トダ 列車で通える範囲に一校あれば十分という方針で、県は高校の数を減らしていますから。

イズミ みんな電車でやよ市内の高校まで通ってます。

オケミズ あなたもですか。

イズミ はい。

カガミ 私たちの学年が最後の卒業生でした。

トダ ゆのかわ鉄道は第三セクターですから、半分はユノマチの経営です。はっきり言って町のお荷物なんですよ。

オケミズ でも、通学列車として欠かせないんだったらそれなりに利用客も。

イズミ ここに高校生が何人いると思いますか。

オケミズ ・・あ・・。

トダ 学校がいらない、とは、そういうことです。

オケミズ・・・。

トダ オケミズさん。私はいずれ町長になって、住みやすく美しいユノマチを復活させたいんです。

カガミ その第一歩が、あの温泉を使った町おこし、というわけです。

トダ だから、今、ユノマチがなくなったら困るんです。

オケミズ でも、そんなに町の財政が苦しいんだったら、合併もありなんじゃないですか。

カガミ 私もそう思ったんですけどね。

トダ 合併してしまつたら最後、住人がほとんどいない山間の集落は、静かに消えるのを待つだけです。

オケミズ そんな。じゃあ、あの秘湯は、

トダ 人も通わないやぶの中で、忘れられていくでしょうね。

カガミ オケミズさん。ここはひとつ、モリノさんに頭を下げて、町おこしにご協力いただけませんか。

オケミズ それは、

トダ 私からもお願いします。モリノさんは気難しい方ですが、町の将来を本気で考える方ですからきっと、

イズミ しなくていいです。

三人 (口々に) え？

イズミ 謝らないでいいです。

トダ イズミさん？

イズミ 謝らないでください。

カガミ え、なんで。

イズミ おじいちゃんは、あれでいいんです。

トダ あれでいいって。

イズミ おじいちゃんには生きがいなんです。

オケミズ 何がですか

イズミ 怒っているときに、一番元気なんです。

トダ おうちでもあれじゃあ大変じゃない？あ、ごめんなさい。

イズミ いえ、うちでは優しいおじいちゃんです。

イズミ、手のひらの小銭を見てほほ笑む。

トダ そうみたいですわね。

イズミ 私、おじいちゃん子で。

カガミ はいー。さっきのモリノさんの声、聞きました？とろけそうでしたよね。

イズミ いつまでも私が小さな女の子に見えるみたいです。

イズミ、少し考えて、

イズミ オケミズさん。今日は帰っていただけませんか。

オケミズ え。

イズミ 私がおじいちゃんを説得します。取材はまた別の日にしてくれませんか。

カガミ そんなあ。もう、旅行雑誌に売り込んでOK出てるんですよ。秋の行楽シーズンに間に合わせよう
と思っ

イズミ お願いします。怒りんぼでも元気なおじいちゃんできてほしいんです。迷惑かもしれないけど。

オケミズ じゃあ、オレは恨まれたまま、ってことっすね。

イズミ ごめんなさい。私がかうまくやりますから、今日は帰ってください。

トダ ということは、予定を再調整しなくちゃね。すぐに取材の候補日を決めてくるので、ここでお待ちい
ただ

オケミズ はい。あ、オレのスケジュールは先週お伝えしたのから変わってません。

カガミ じゃあ、あとは溪流出版とうちの広報課ですわね。

トダ カガミくん、役場に戻ってすぐに調整するよ。

カガミ はい。イズミさんもここで待ってもらえたら話が早いです。
イズミ わかりました。よろしくお願いします。

トダ 急ぐよ。

カガミ はい。

カガミ、トダ、急いで立ち去る。

イズミ 何か飲みますか。

オケミズ あ、じゃあ、

オケミズ、小銭を出してイズミに渡して

オケミズ お茶で。

イズミ はい。

イズミ、自販機でお茶と自分の飲み物を買う。オケミズに渡す。

オケミズ どうも。

二人、飲み物を飲む。

二人 あの、

オケミズ あ、どうぞ。

イズミ いえ、オケミズさんから。

沈黙

二人 あなの、

二人、くすつと笑って

オケミズ あんな優しい声も出るんですね。

イズミ おじいちゃんですか。

オケミズ オレはずつと、クマに威嚇されてるみたいでした。

イズミ (笑って) クマでもイノシシでも元気なら。

オケミズ このチェーン、イズミさんをここから出さないため、て、さつき。

イズミ おじいちゃんが言ったわけじゃないんですけど。

オケミズ そうなんですか。

イズミ でも、私までいなくなったら、て、きつと心配してます。

オケミズ 何年生ですか。

イズミ 高3です。

オケミズ ああ、それで。進学？

イズミ 就職です。

オケミズ もう決まったんですか。

イズミ はい。

オケミズ どこに？

イズミ 病院です。やまびこ医院。

オケミズ 近くですか。

イズミ ユノマチ唯一の病院なんですよ、すごいでしょう。

オケミズ 受付、とか？

イズミ 見習いです。看護師の。まあ、雑用です。

オケミズ へえ。

イズミ、うつむいて何やら考えている様子。

イズミ オケミズさん。

オケミズ はい。

イズミ ライターっているんなところ行くんですよね。

オケミズ 全国を飛び回ってますよ。

イズミ どこに住んでるんですか。

オケミズ 東京です。

イズミ どんなどころ。

オケミズ いいところじゃないですよ。空気はまずいし、いつもうるさいし。

イズミ ふうん。

オケミズ ここはいいところですね。

イズミ みんなそう言います。

オケミズ でしょうね。

イズミ 知らない人は。

オケミズ え。

イズミ 不便だし、何もなし。お店も学校も、仕事も。

オケミズ 自然がいっぱいですよ。

イズミ 田んぼも畑も、山も、人がいないから荒れ放題ですよ。

オケミズ イズミさんはここに残りたいたいですよね。

イズミ 約束したから。おじいちゃんに。

オケミズ ユノマチに残る、て？

イズミ (ふっと笑って) ずっと昔。小さいころ。

オケミズ 約束を守ってるんですね。

イズミ おじいちゃんは、そう信じてます。

オケミズ 違うんですか。

イズミ 私、看護師になりたいんです。

オケミズ 見習いから看護師めざすんですね？

イズミ 本当は、ちゃんと進学して看護の勉強がしたい。ここを出て。

オケミズ おじいさんには、

イズミ 言えませんよ。

オケミズ 看護師になってここに戻ってくるって言ったらいじやないですか。

イズミ 絶対に言えません。

オケミズ ほんの数年のことですよ。

イズミ 無理ですって。

オケミズ そんなことであきらめるんですか。

イズミ そんなこと。

オケミズ 未来は自分で決めるべきです。

イズミ オケミズさん、おじいちゃんに謝られて言われたんでしょ。

オケミズ オレのしたことじゃないんですけどね。

イズミ 謝っても終わらないと思いますよ。

オケミズ え。

イズミ おじいちゃんの怒りは、おじいちゃんが死ぬまでなくならないと思います。

オケミズ 死ぬまで・・・。

イズミ だってそうじゃないですか。誰にでも確実に許してもらえる方法なんてないですよ。

オケミズ おじいさんは謝れって言ってるのにな？

イズミ 過去が消えるわけでもないし。

オケミズ 達観してるなあ。本当に高校3年生ですか。

イズミ あ、ひどい。

オケミズ いや、大人だなあって思っただけです。

イズミ かもしれません。一人で考える時間がありすぎるんで。

オケミズ 来年は社会人ですもんね。

イズミ 私、おじいちゃんが口をきいてくれた病院に就職して、ユノマチにずっといるんです。おじいちゃん
の悲しい顔見たくないから。

オケミズ 優しいんですね。

イズミ でも、どこかでおじいちゃんが死ぬのを待ってる自分に気づいています。

オケミズ ……。

イズミ 私をここに縛り付けるおじいちゃんがいなくなるのを待ってる。それまでの辛抱だっと思ってるよ
うな気がする。

オケミズ ……。

イズミ でも、本当におじいちゃんが大好きなんです。看護師になりたいのも、おじいちゃんもつと年取
って弱っても世話してあげられるようになって思ったのがきっかけなんです。

オケミズ 過去も、人の気持ちも変えられないか。

イズミ 変わりっこないです。

オケミズ イズミさんも同じでしょ。

イズミ え？

オケミズ 気持ち、簡単に変えられないですよ。

イズミ ……。

オケミズ どっちも本当の気持ちだから、辛いですね。
イズミ ……。

オケミズ でも、大丈夫ですか？おじいさんの説得。湯治場を見せるの、許してくれますかね？
イズミ 弱み、いっぱい知ってるから大丈夫です。

オケミズ かわいいのか怖いのかわからない孫ですね。

楽し気に笑う二人。

カガミ、戻ってくる。

カガミ オケミズさん。出版社と連絡取れました。ぎりぎりまで待つてくれるっておっしゃってるんですけど。

モリノがタナカと楽しげにおしゃべりしながら戻ってくる。

カガミ あれ？モリノさん。

イズミ おじいちゃん、デイケアは？

タナカ お目当てのプログラムが今日は変更になっちゃって。

モリノ 折り紙とかお手玉とか、女の遊びができるか。

タナカ モリノさんは運動の方が好きだから、散歩ということにして抜けてきました。

モリノ そうじゃ。タナカちゃんはどう気が利くええヘルパーさんじゃ。

カガミ え！モリノさんが名前呼んでる。よほどタナカさんがお気に入りなんですね。

イズミ いつもありがとうございます。

タナカ いえ。もどりたいとおっしゃるんで、そこまで車でお連れしました。
オケミズ タクシーと勘違いしてないか。

モリノ イズミちゃん、おじいちゃん、ええことを思いついたぞ。

イズミ なあに？

イズミ、モリノのそばに。手にしていたジュースを何気なくベンチに置く。

モリノ 見習い看護婦さんもええが、タナカちゃんみたいにヘルパーさんもええぞ。あそこの、ほれ、あー、
タナカ デイケアゆの？

モリノ それじゃ、デイケアーで働いたらええ。

イズミ え？

モリノ イズミちゃんは優しい子じゃからピッタリじゃ。わしが頼んでやろう。

イズミ でも、

オケミズ じいさん。

モリノ やまびこはわしが断ってやるから心配せんでええ。

オケミズ じいさん！

モリノ なんじゃ。

オケミズ イズミさんは、そんなところでは働きません。

イズミ オケミズさん！

モリノ そんなところじゃと？

オケミズ イズミさんは、進学したいんですよ。

イズミ オケミズさん、やめてください。

オケミズ イズミさんの夢が握りつぶされるのを見てられません。

モリノ 誰が握りつぶしとると言うんか。

オケミズ イズミさんは、やまびこ医院には就職しません。ヘルパーにもなりません。ここを、ユノマチを出て、看護師になるんです。

イズミ やめてください。

モリノ なんでお前がそんなことを言うんじや。

オケミズ イズミさんから聞きました。

モリノ よそもんに本当のことを言うわけなからう。

オケミズ よそ者だからですよ。

モリノ うん？

オケミズ よそ者だから、本当の気持ちを話せたんですよ。ですよ、イズミさん。

イズミ 違います。

オケミズ イズミさん。

イズミ やめてください。

モリノ イズミちゃん、本当か。

イズミ ごめんなさい。

モリノ なんて謝るんか。

イズミ ごめんなさい。

モリノ ここにおると言うたのは嘘か。

イズミ 嘘じゃないよ。

オケミズ でも、今のイズミさんの気持ちも本当ですよ。

イズミ オケミズさん、やめてください。

オケミズ あきらめちやダメです。

イズミ 私はここにいるんです。おじいちゃんと一緒に、ずっとここに。

オケミズ いつまで？

イズミ え？

オケミズ いつまでそうしているつもりですか。

イズミ ……。

モリノ タナカちゃん。

タナカ はい。

モリノ イズミを連れて行ってくれんか。デイけあーを見せてやってくれ。

オケミズ じいさん！

モリノ まあ、いつペン見てみい。それで嫌なら、どこへでも行くがええ。

イズミ おじいちゃん。

モリノ 好きにせい。わしはしらん。もうお前の面倒は見ん。

イズミ おじいちゃん。

モリノ もうわしの孫でもなんでもない。

オケミズ そこまで言わなくても、

モリノ 早う行け！

イズミ ……。

モリノ タナカちゃん。

タナカ はい。

モリノを見つめるイズミを、タナカがそつと誘って連れていく。

モリノ、ベンチに残されたイズミのジュース手に取り、見つめながらベンチに座る。

モリノ イズミちゃんも大きゆうなつてしもうたか。

モリノ、線路を見つめる。いづれ出ていくイズミの姿を思い描いているのか。鉄道を存続した昔を思い出しているのか。

カガミ あの一、イズミさんが取り持つてくれるっていう話は・
オケミズ もう期待しないほうがいいでしょ。

カガミ ええー！

オケミズ また振り出しですね。

カガミ そんなあ。

モリノ こら、役場、こいつの謝罪はどうなったんじゃ。

カガミ いや、あの

オケミズ 謝りませんよ。オレは悪くないですから。

モリノ 罪を重ねたのう。

オケミズ はあ？

モリノ かわいい孫を奪った罪は大きいぞ。

オケミズ かわいい孫を救いたかっただけですよ。

モリノ ふん、よそモンが。やっぱりろくなことはないわ。

オケミズ ことなくそじじいに、よくあんな優しい孫が。

モリノ 何じやと！

カガミ お二人とも、

モリノ 役場、こいつを追い返せ。

オケミズ いいかげん、このじいさん黙らせててくださいよ。

モリノ はようせい。

オケミズ カガミさん。

モリノ 役場！

オケミズ カガミさん！

カガミ、困り果てる。

カガミ 町長に相談してきますー。

カガミ、退場。

モリノ また逃げよったわ。お前も帰れ。ここは開かんし、もう案内人もおらんぞ。
オケミズ 帰りますよ。こんな田舎までわざわざ来てやったのに。罪人呼ばわりなんて冗談じゃない。

オケミズ、ホームの方を向く。

モリノ ふん。その勢いでわしらの悪口でも記事にせい。

オケミズ 誰も読みませんよ、そんなもん。オレは温泉のすばらしさしか書きません。

モリノ 湯に入りもせずに、わからんじやろうがなあ。

オケミズ 入れてもらえませんでしたから。じいさんもとっと帰ったらどうつか。

モリノ よそモンが消えるまで番をせんといけんからの。

無言でチェーンの両側にたたずむ二人。オケミズは線路を見つめ、モリノに背を向けている。
人の声が聞こえなくなったせいとか、蟬時雨が聞こえる。

モリノ あの湯はリユーマチに効く名湯じゃ。うちのばあさんも頼りにしとった。人がわんさか来るように
なって、一時期、湯がすっかり枯れてしもうた。寒い冬じゃったのお。膝が痛かったらうに文句も
言わんで。雪の深い朝じゃったのお。

オケミズ ばあさんって、奥さん？

モリノ 独り言じゃ、黙っとれ。

オケミズ 勝手に聞こえてくるんで、もうちよつと小さい声でお願いできますか。

モリノ (もつと大きな声で) 雪の深い朝じゃった。

オケミズ うるせー。(と、イヤホンを装着しようとする)

モリノ もう一回、湯に入らせてやりたかったのお。

オケミズ、動けない。

モリノ 本当に必要なモンに、あの湯は、使わしてやりたいんじや。

オケミズ、振り返る。遠くから、列車が近づく音が聞こえてくる。

オケミズ じいさん。

モリノ これに乗らんかったら、次の汽車は2時間後じや。

列車がホームに入ってくる。

オケミズ 帰ります。

モリノ おお、帰れ、帰れ。

列車が止まる。

オケミズ じいさん。

返事はない。

オケミズ モリノさん。

モリノ ……。

オケミズ また来ます。

モリノ もう来んでもええぞ。

オケミズ ありがとうございます。

モリノ ……。

オケミズ 次はカメラを置いて、手ぬぐい持ってきます。

オケミズ、列車に乗り込む。発車。

去って行く列車を見つめるモリノ。

カガミが戻ってくる。

カガミ モリノさん、どうでしょう。町長立ち会いのもと、あれ？

モリノ 帰りおったわ。

カガミ えー。

モリノ、懐から鍵を取り出して、チェーンを外す。

モリノ 今度、さっきの若いのが来たら、通してやってくれ。

カガミ じゃあ、オケミズさん、謝罪されたんですね。

モリノ いや。

カガミ じゃ、なんで。

モリノ わかったようじゃったからの。

カガミ 何がですか。

モリノ わしの思うたことが、の。

カガミ 謝罪じゃなくて。

モリノ こんなもん、くぐりやあよかつたのに、まじめなヤツじや。

モリノ、鍵をカガミに渡す。

と同時にM「月夜に光る」C・I。同時に照明は夕焼け色、カガミとモリノにサス。

モリノ、ゆったりと歩いて去る。

カガミ、モリノの後ろ姿を見送る。

改札にサス、カガミとモリノはシルエットに。

音楽が高まり、幕。

E
N
D